



マークしたマネキンや自分で切ったウィッグを手にする
利用者=いずれも浜松市中区のたけし文化センターで



「文化は」こういうもの」「芸術は」こうあるべきだ」といった概念は、「ここには存在しない。その人が情熱を傾けて続けていることは、文化であり個性である。日常に少し疲れたら、壁を見つめて口元を緩ませる。舞さんは粘着テープをちぎりながらカラカラと音を鳴らしている。壁が好きなあっくんは、壁を見つめて口元を緩ませる。舞さんは粘着テープをちぎりながら」

浜松エフエム放送が受信できない地域の方も、同社ホームページ内の「JCB A」のバナーから生放送でお聴きいただけます。

昆野記者のひとこと

防音室の扉を開くと、ドラムをたたいたりギターを弾いたり、低いデスボイスをシャウトする人も。即興で音が奏でられる横で、久保田さんの長男の壮さん(三歳)は、小石が入ったプラスチックのケースを振り続け、カラカラと音を鳴らしている。

壁が好きなあっくんは、壁を見つめて口元を緩ませる。舞さんは粘着テープをちぎりながら」

「もともと、レッツは重度の知的障害のある壮さんらの居場所として設立された。久保田さんは、障害者の独特な行動について「問題行為と言ってしまえば所を増やしたかった」と狙いを語る。

「もともと、レッツは重度の知的障害のある壮さんらの居場所として設立された。久保田さんは、障害者の独特な行動について「問題行為と言ってしまえばそれまでだけど、本人がとにかく好きで手放さない行為だと見方を変えれば、本人を表す大切な行為とも言える」と話す。

「取るに足らないものだと一方的に判断するのではなく、その人が持っているものや行為を、大切な文化として考えることは、他者を認めて尊重することにもつながります」

きょうもこの場所には、さまざまな「文化」が集う。ぜひ扉を開けてみては。

自由な表現 魅力あふれ

同センターはNPO法人「クリエイティブサポートレッツ」(中区)が二〇一八年から運営する施設で、一日二十人ほどの

障害者とのシェアハウスも併設。理事長の久保田翠さん(五七)は「障害者は郊外の施設に入る傾向があり、街中心部にも居場所を増やしたかった」と狙いを語る。

「もともと、レッツは重度の知的障害のある壮さんらの居場所として設立された。久保田さんは、障害者の独特な行動について「問題行為と言ってしまえばそれまでだけど、本人がとにかく好きで手放さない行為だと見方を変えれば、本人を表す大切な行為とも言える」と話す。

「取るに足らないものだと一方的に判断するのではなく、その人が持っているものや行為を、大切な文化として考えることは、他者を認めて尊重することにもつながります」

ら、にこにこ。平子君はにおいをかぐのが好きで、床に寝転んでフェルトや手を鼻に近づける。ムラキンガさんは人の話に耳を傾けながら情緒たっぷりの詩を披露してくれる。

ピアノの上にすりりと並べられた顔だけのマネキンには、カラフルなマークが施され、個性的なウィッグがかぶせられている。マークとカットを手掛けた岸君は「かわいいでしょ。好きなんだ」と自慢げに話す。皆、好きなことをあるがままに突き詰めている姿に「自分も自由でいいんだ」と気付かされる。



人目を引く、にぎやかな外観

浜松市中心部。交通量の多い通りを歩いているにぎやかな外観の建物が目に入る。建物の前に置かれているのは、毛糸の付いたヘルメット、ひっくり返ったバケツ、メトロノーム…。手書きの詩も貼られている。一見雑貨屋のようだが、そこではない。障害福祉関連施設「たけし文化センター連尺町」(中区)だ。扉を開けて中に入ると、さまざまな「表現」があふれた空間が広がる。(昆野夏子)

浜松市中心部。交通量の多い通りを歩いているにぎやかな外観の建物が目に入る。建物の前に置かれているのは、毛糸の付いたヘルメット、ひっくり返ったバケツ、メトロノーム…。手書きの詩も貼られている。一見雑貨屋のようだが、そこではない。障害福祉関連施設「たけし文化センター連尺町」(中区)だ。扉を開けて中に入ると、さまざま